

日本語教師とボランティアの
カルチャー・ステレオタイプに関する調査研究
質問紙とインタビュー調査の分析結果から

倉地 暁美

広島大学大学院教育学研究科

**Research on Cultural Stereotypes
of Japanese Teachers and Volunteers**

Akemi KURACHI

Graduate School of Education, Hiroshima University

SUMMARY

While many psychologists have engaged in the research on Intercultural Education or Japanese as a Second Language, little examination regarding the cultural stereotypes of

those teachers have been done in Japan. Investigating teachers' cultural stereotypes and attitudes towards cultural stereotypes are extremely significant, because these images and understandings are likely to influence the way their students construct their own images and knowledge of the cultures. In this study, questionnaires are provided to teachers and teaching volunteers in Japan to understand the nature of their culture stereotypes and their attitudes toward cultural stereotypes.

Then the author conducted in ethnographic interviews of the teachers and volunteers who show a high degree of both awareness and self-control of culture stereotypes. In this paper, the author intends to discuss mainly the results of ethnographic interviews which depict the backgrounds and life history of those teachers and teaching volunteers.

Out of 79 subjects, 7 teachers who showed great amount of awareness as well as self-control regarding culture stereotypes were interviewed from 2003 to 2004. All those interviewees were either the teachers or the teaching volunteers of JSL, their ages range from 30 to 55, and they have taught more than 3 years. Furthermore they lived more than a year in the foreign countries, or had enriched experiences of foreign exchange in Japan.

Through interviews, it was found that none of the subjects were brought up by authoritative fathers, and 5 out of 7 subjects were either bullied by their school mates when they were in school. or belonged to a social minority in other countries to a great extent. In addition, two subjects indicated the importance of key persons who had influenced the subjects' attitudes towards culture stereotypes. One subject said that her experiences in teaching Japanese to foreign students played a significant role in her view of foreigners. Another subject indicated that her specialization in cultural studies from a critical perspective greatly influenced her growing concept of cultures. As to common personality and traits, it was found that all those subjects who have high awareness of cultural stereotypes showed a talent for reflexivity and self-monitoring ability. They all valued to their own individual differences and those of others, and appreciated diversity among people, showing their flexibility in many ways.

In conclusion, the following two points are discussed from the findings of the research: (1) How Japanese language teachers' culture functions to produce and reinforce culture stereotypes and (2) What kind of Japanese education could be effective

in order to decrease the degree of cultural stereotyping in learners.

はじめに

青木(2001)は「ステレオタイプの理解というのは、異文化や他者に対する極端な理解の仕方ですから、常にそこには人間を人間としてみる視点が欠けています。相手が何々教徒、何民族、何人と聞いただけでまともに相手を見、現実を捉えようとする耳目は完全にふさがれてしまう。なんともやりきれない浅はかな行い」(p.119)であると論じている。

従来日本語教育・留学生・異文化間教育などの領域では、多くの心理学者が様々な実証的研究を手がけてきたにもかかわらず、教師のカルチャー・ステレオタイプや外国人学習者にとって、身近で影響力の大きい日本語教師(ボランティア)のカルチャー・ステレオタイプの実態についての解明は進んでいない。外国人学習者の数少ない情報源として、あるいは文化の媒介者として、日常的な接触機会が多く、彼らに少なからぬ影響力を及ぼし得る日本語教師(ボランティア)は、一体どのようなカルチャー・ステレオタイプを有し、それを如何に捉え、対処しているのか。日本語関係者のカルチャー・ステレオタイプ遞減は、多文化共生時代の教員養成における大きな教育課題であり、その方途を探るための基礎的研究は不可欠である。

そこで本研究では：(1)初めに日本語教育に携わる教師とボランティアを対象にアンケート調査を実施し(2001年4月～2003年3月)、彼らのカルチャー・ステレオタイプに対する一般的傾向を明らかにした後、(2)(1)の調査結果に基づいて、カルチャー・ステレオタイプに対する高い気付きを持った対象者を抽出し、エスノグラフィック・インタビューを行い、カルチャー・ステレオタイプに対する高い気付きを持った教師とはどのような背景を持った教師なのか、カルチャー・ステレオタイプに対する高い気付きは、いかにして育まれるのか、ライフ・ヒストリーを聞き取った(2003年7月～2004年7月)。(1)の質問紙調査の分析結果の詳細については、既に公刊済みであるが(倉地 2003a, b, 2004a, b, c)、(2)の追跡調査にいたるまでの経緯を明らかにする必要があるため、研究の概略を紹介するにとどめ、本稿では主として(2)の質的研究の結果に焦点を当てて論じたい。

(1) 質問紙調査

2001.4 ~ 2003.3 科研

目的

渡日経験が浅く、目標言語の習得、目的文化に対する理解が十分でない日本語学習者の言語・文化学習を支援する立場にある教師・ボランティアは、どのようなカルチャー・ステレオタイプを持っているのか、又、ステレオタイプに対してどのような気づきや認識を持っているのかを明らかにする

方法

2002年夏、西日本在住の調査協力者8名に調査票の配布・回収を依頼し、日本語教師・ボランティアを対象に質問紙調査を実施した。本研究は、日本語教師、ボランティアのステレオタイプに関する一般的傾向を探ることを目的とするため、大学で異文化間教育・心理学に関する専門的な教育・指導を受けた者に関しては、予め本研究の対象者リストから除外した。

質問紙の質問項目は以下の3つのパートより構成されている。

デモグラフィックス

年齢、ジェンダー、職業、日本語教育歴、海外生活経験、居住地、国際交流経験の有無、外国人との交友関係などを問う。

カルチャー・ステレオタイプに対する認識を問う質問項目

具体的には「カルチャー・ステレオタイプは、有益か、危険か」と「ステレオタイプを低減する必要があるかないか」を選択させる質問項目（複数回答可能）

カルチャー・ステレオタイプ表出に対する自己抑制（気づき）を明らかにするための質問項目

具体的には「あなたはどのようなカルチャー・ステレオタイプをもちていますか。日ごろあなたが日本語教師として考えているまま、感じるままを表現し、文章を完成して下さい」という設問のあとに「日本人は である。」「アジア人は である。」など予め設定した17の質問項目に対して、文章完成法によって回答を求めた。それについて対象者が何項目、回答したかをカウントし、それをカルチャー・ステレオタイプ数とした。

結果

2003年夏、西日本在住の日本語教師・ボランティアを対象に123部の質問紙

を配布、2ヵ月後91名より調査票を回収した。(有効回答率73・98%)しかし、データ整理の段階で12名が日本語を教えた経験を持たない者であることが判明したため、この12名を除く79名の調査票を分析データに使用した。分析の結果、(a)日本語教師のカルチャー・ステレオタイプの認識と自己抑制(気づき)のレベルに関する段階仮説(倉地2003a, b)を生成すると共に(b)「ステレオタイプ数」が多い対象者 VS. 比較的少ない対象者の比較考察を行った(倉地2004a, b, c)。

カルチャー・ステレオタイプ数が多い対象者について言えば、質問紙調査で具体的なステレオタイプを記述させる17のすべての設問項目に回答した者は、39名で全体(N=79)の49.37%で、全体の半数に及び、15項目以上に回答した者を含めると52名(65.82%)と6割以上を占めている。ちなみに、ステレオタイプの認識に関する質問項目に対して、「ステレオタイプは有益」、そして、あるいは「低減の必要性がない」と回答した対象者の全員が、具体的なステレオタイプの記述において12項目以上の回答をしており、ステレオタイプが「有益」あるいは「低減の必要性がない」と答えた対象者の75%が、具体的な記述をする設問に15項目以上の回答を示した「ステレオタイプ数」の多い対象者であった。このことから、ステレオタイプ数の多いものは、概してステレオタイプの危険性に対する認識も低いと言える。

一方ステレオタイプ数が少ない対象者に関して言えば、質問紙調査で具体的なステレオタイプを一つも記述しなかった0回答者は3名、5項目以下の回答者は7名で全体(N=79)の8.86%に過ぎなかった。ステレオタイプの有益性や低減の不必要を選択したものが1名も該当しないのは、ステレオタイプ数11項目以下の比較的ステレオタイプ数が少ない回答者で、その数は17名(21.52%)であった。17名の中には、一般の大学生・大学院を含めた30歳以下の若者は一人も該当しなかった。又、3年以上の日本語教育歴もしくは長年にわたる国際交流経験のない者もこれに該当しなかった。こうした点から見れば、ステレオタイプ数が少なく、カルチャー・ステレオタイプの危険性を認識している者は、一定の人生経験、現場経験を持った教師であると言える。

しかしデータを概観すれば、30歳以上で、5年以上日本語を教えたことのあ

る日本語教師の中にもステレオタイプ数の多い対象者は少なくないし、長期の海外留学・渡航経験を持ち、日本語教育経験が豊富な教師の中にも、ステレオタイプの表出に何ら躊躇のないものが存在する。とすれば、いったい対象者の何が、ステレオタイプの対するアウェアネスを生み出しているのか。その問いに対する回答は、無論、質問紙調査の結果からは導き出せない。そこで2003年7月から追跡調査として、インタビューによる質的調査を実施した。

(2) 質的研究 (追跡調査)

2003年7月～2004年7月 科研

目的

追跡調査として2003年4月から、前述の質問紙調査に協力した調査対象者の中から、次節で述べるような手順で一部の被験者を抽出し、エスノグラフィック・インタビューを実施した。追跡調査の目的は以下の6点であるが、本稿では紙幅の都合上、(a)(b)についてのみ言及する。

質的研究の目的は、(a)質問紙調査でステレオタイプ数が少なかった対象者が、本当にステレオタイプに対する気づきの高い対象者なのかどうか、(b)もし、そうであるとすれば、カルチャー・ステレオタイプ数の少ない教師やボランティアのステレオタイプ表出を自己抑制する能力やアウェアネスは一体どこでどのように獲得されたのか、カルチャー・ステレオタイプ遞減の方向性を明らかにするために、自己抑制と背景要因の絡みを解き明かすこと。さらに、(c)質問紙調査から導かれたカルチャー・ステレオタイプの段階仮説は妥当か (d)ステレオタイプの表出を自己抑制できる教師は、一元的な日本人感を学習者の方からぶつけられたときにどのような対応をするのか(典型事例に対する反応)。(e)カルチャー・ステレオタイプに対する気づきの高い教師は、ステレオタイプに凝り固まった学習者や同僚の教師に対してどのような対応をしているのか。(f)日本語教師のカルチャー・ステレオタイプに対するアウェアネスと異文化間トレランスの関係はどのようなものなのかを明らかにすることであった。

予備調査：対象者の選定

追跡調査で最初に確かめなければならなかったのは、調査票に具体的なステ

レオタイプを全く、あるいは少ししか記入していない(空欄が多い)ということが、どのような意味を持つのか。記述が面倒、あるいは知識不足だから記述しなかったのか、それとも、そこにステレオタイプ表出に対するアウェアネスが反映しているのかを明らかにすることであり、第二に、もしそれが後者であるならば、何項目ぐらいの回答数を境に、気づきの「ある」と「なし」の違いが生じるのかを解明することであった。

そこで、(ステレオタイプが「有益」、あるいは「低減の必要性がない」と答えた回答者が一人もいない)ステレオタイプ数 11 項目以下の回答者 17 名のうち、追跡調査に快く応じた 9 名の対象者に、予備調査として、質問紙調査の回答結果を示しながら、彼らがなぜこのような回答をしたのかを半構造的なインタビューで問うたところ、回答数が 9 以下の対象者と 10 以上の対象者との間に、カルチャー・ステレオタイプに対する考え方に明確な違いが認められた。すなわち回答数 9 以下の対象者の場合、「カルチャー・ステレオタイプを持つことが望ましくない」、あるいは「一部だけを見て全体を語るなどできない」、「^{なにじん}何人と一括りにすることは無理」、「一人一人違うのにカルチャー・ステレオタイプなど持てない」などとカルチャー・ステレオタイプの危険性を確信しているから、「あえて回答しなかった」と反応しているのに対して、ステレオタイプ数 10 項目以上の対象者には、カルチャー・ステレオタイプを表出することに対する気づきや自己抑制が認められず、一様に「空欄にしたのは、その文化集団に対する知識がなかったため」との回答を示した。

以上のようなパイロット・スタディの結果を踏まえて、本研究では、ステレオタイプ数 9 項目以下のカルチャー・ステレオタイプに対する気づきの高い対象者を「カルチャー・ステレオタイプの少ない対象者」とみなし、エスノグラフィック・インタビューを試みることにした。アンケートの質問項目についても、ステレオタイプ数 9 以下の対象者は、追跡調査時と質問紙調査時におけるステレオタイプの危険性や逡減の必要性に関する質問項目への解答に一貫性があり、変化が認められなかったのに対して、ステレオタイプ数の多い回答者の場合は、ステレオタイプに対する認識があいまいで、面接時と質問紙調査時の

回答が変わっていたり、インタビュー中に回答を変化させたりするなど不確かな様相を呈していた。特に回答に確信のない対象者においては、ステレオタイプの危険性や逡巡に対する認識を問う質問項目に対して、社会的に望ましい回答、もしくは調査者が意図する正解は何かを探ろうとする傾向が強く認められ、回答に一貫性が認められなかった。ステレオタイプ数が少ないステレオタイプ数 9 以下の対象者のうち、追跡調査に協力してもよいという意思表示として、調査票に氏名と連絡先を記述していた対象者は、質問紙調査に対する関心が高いのみならず、1 年前に実施したアンケートの回答内容についても、しっかり記憶しており、回答に変化が認められなかった。彼らは全員、インタビュー調査への協力を快諾してくれたため、2003 年 8 月より、本調査を実施することにした。

方法

前節で論じた(a)の研究目的を遂行するための具体的な方法として、質問紙調査、及び質問項目を再吟味するために、追跡調査への協力を了解したステレオタイプ数が少ない対象者に対する半構造的インタビュー (b)に関しては、追跡調査への協力を了解し、質問紙調査でステレオタイプ数が少なかった対象者の背景を探るための非構造的なエスノグラフィック・インタビューを実施した。

結果

ステレオタイプ数 9 以下の対象者は、12 名で回答者全体の 15.19% (N = 79) を占めていた。その中で、追跡調査に協力すべく質問紙調査実施時点で、氏名、連絡先を調査票に記入していた対象者は 12 名中 7 名 (58.33%) であった。特にステレオタイプ数が 0 から 3 以下のステレオタイプ数が特に少ない 5 名は、全員が追跡調査への協力を意思表示しており、ステレオタイプへの気づきが高いほど追跡調査への協力を申し出る対象者が多い傾向が現れている。以下ではこの 7 名に関するインタビュー調査(延べ 40 時間)の結果を明らかにしたい。調査協力への意思確認と面接の日程調整は、電話及び E メールで行った。対象者は関西、中国、四国、九州地方と西日本の各地に分散していたため、対象者にと

ってできるだけ都合のよい場所に調査者が何度か出向き、一人当たり延べ5～7時間程度の面接を実施した。インタビューは、主としてホテル、レストラン、大学のラウンジなど、飲食をしながら比較的長時間できるだけくつろげるような場所で行ったが、対象者の希望により自宅で実施したケースもある。インタビューの内容は対象者の許可を得て、すべて録音した。以下は7名のデモグラフィックス、性格特性、及び、その他の背景要因である。

() デモグラフィックス

対象者のデモグラフィックスに関しては表1に示したとおりである。7名中、女性が6名で、7名全員が30歳以上55歳未満の日本語教師(ボランティア)で、30歳以下の若い普通の大学生や大学院生、55歳以上の日本語教師(ボランティア)は1人も該当しなかった。日本語教育歴は3年以上のものが6名と多く、3年以下の1名も、ボランティア教室でアシスタントとして教えた時期を含めれば5年以上の教歴をもっていた。勤務状況は非常勤が多く、専任教員は1名のみであった。学歴は社会人入学で大学4年に在学中(質問紙調査時)の1名を除いては、全員が四大卒で、大学院修了者が4名と総じて高く、6名が文学、言語、言語教育など、文科系学部出身者であった。1年以上の海外生活体験がある者が6名、授業以外でも外国人と交友関係があるものが6名いた。1年以上の海外生活体験を持たない1名と、外国人との授業以外での交友関係がないと答えた1名については、いずれも15年以上、国内でボランティアとして小集団による異文化接触、多様な国際交流を地道に続けている対象者であることが判明した。すなわち、ステレオタイプに対する気づきをもった対象者は、教師経験や人生経験の乏しい学部生や大学院生ではなく、国際交流体験、人生体験、教師歴が、ある程度豊かな日本語教師(ボランティア)に限られていた。

表1 対象者のデモグラフィックス

(1) 性別

男性1名、女性6名

(2) 職業

日本語教師6名(日本語学校非常勤2、大学非常勤3、大学専任1)、学部生の日本語ボランティア1名。(ただし、30代後半で4年制大学に再入学し、企業での勤務経験も長い上に、15年以上海外や地域で様々な国際交流活動を継続しており異文化接触体験・国際交流経験も豊富)

(3) 日本語教育歴

5年以上の日本語教育歴4名、3年以上4年未満2名、2年未満1名(ボランティア日本語教師歴が長く、その他の国際交流経験も豊富)

(4) 年齢

30歳~40歳未満5名、50歳~55歳未満2名、30歳未満または55歳以上0名

(5) 学歴

学部4年生1名(ただし30代で大学に再入学したもの)四大卒6名(内、大学院修士課程修了以上4名)。理系1名、文系6名(専攻は日本語(教育)・国語・国文学・言語学)

(6) 婚姻歴・扶養家族

婚姻歴のある者6名(離婚経験者を含み、6名中子どもがいる者4名)

(7) 海外生活経験年数

5年以上2名、3年~5年未満2名、1年~3年未満2名、「なし」1名(「なし」と答えた者は、過去20数年来、ボランティアや研修、国の派遣事業などで何度も渡航し、国内でも積極的に多様な国際交流活動をしている。)

(8) 外国人との交友関係

「心友がいる」4名、「仲間がいる」2名、「ない」1名(「交友がない」と答えた対象者は、15年来在日外国人を対象にボランティア活動を続けていた)

(9) 外国人の親族

外国人の親族がない者7名

(10) 日本語教育以外の国際交流活動の経験

「あり」3名、「なし」4名

(11) 日本語教育以外の外国人との私的な関わり

「頻繁」1名、「時々」4名、「なし」2名

(12) 出身地(規模)

「中都市」2名、「小都市」3名、「町村」2名、「大都市」0名

() 気づきを持った対象者のその他の背景要因

家族構成・家庭・生育環境

ステレオタイプに対する気づきを持った対象者に関して、まず家族構成・家庭・生育環境に着目してみると、7名の対象者全員が長女または長男(うち一人っ子1名、第2子1名を含む)で、大都市出身者は一人も含まれていなかった。

対象者全員が中都市または、人口 10 万以下の小都市あるいは 1 万人未満の町村で生育している。7 名の対象者の生育環境で共通する点は、礼儀作法などには厳しい反面、未成年だった対象者が遠く他府県の大学に進学することや、大学在学中あるいは卒業後に海外に出ていくことに対して、前向きに賛同してくれるような進歩的な考え方を持った親に養育されていたという点である。すなわち因習的な古い価値観で子どもを親元に縛り付けるような権威主義的な養育態度をもった親に育てられた対象者は一人もおらず、対象者は親の養育態度について「子どものころから自分のことを『さん』づけで呼んでくれた」、「私が海外に出ることを喜んでくれた」、「『地元の大学なんかに行くな』と言われ続けた」、「『都会に出て勉強するほうがよかろう』とってくれた」、「弟(妹)のことで親は私に子育ての相談をした」などと述べている。ちなみに対象者の父親は全員が勤め人で、7 人中 5 名の父親が教職関係（うち 1 名は両親ともに教員）で、1 名が技術者、1 名が会社員という内訳であった。

ステレオタイプと権威主義的なパーソナリティと親の養育態度の結びつきに関しては 1950 年代に広く支持された Adorno ら(1950)の古典的な研究があり、アドルノらの研究では、権威主義的パーソナリティを測定する F 尺度が偏見・ステレオタイプの強さを測定する指標の一つとして用いられた。その後この F 尺度の妥当性が疑問視されたことや、「個人の偏見態度がパーソナリティ要因によって決定付けられるという考え方からは、状況によって偏見傾向が変化することを説明できない」などといった見地から反論が唱えられたことは周知のとおりである。本研究のインタビュー調査から導かれた推論は、決して親の養育態度やパーソナリティ要因のみで、ステレオタイプに対する態度形成が説明できると主張するものではない。本研究の結果は、カルチャー・ステレオタイプの少ない対象者を生む一つの背景要因として、権威主義的でない家庭環境の中で育成されることが一定関与するのではないかということを示唆するものである。

いじめ・マイノリティ体験

次に、ステレオタイプに対する気づきの高い対象者を生む背景要因として、7 人中 5 名が「体験した」と答えたのが、いじめ・マイノリティ体験である。具

体的には、幼稚園・小学校時代に、転校生であるがゆえに、あるいは体格が大きい、小さいというような理由で受けた、周りの子どもたちによる身体的・言語的な暴力や、冷淡な反応による疎外感、中学・高校時代の同級生による大人気ないいじめや陰湿な仲間はずれである。その他にも、海外で言葉ができるのに、会話が全く進まず大変苦労した経験、ワーキング・ホリディのような制度で海外に行ったときに、奴隷のようにこきつかわれたという「聞くも涙、語るも涙の物語」の経験をした者などがあり、彼らは「身をもって、ステレオタイプな見方は危険であることを自分の中ではっきりと認識した」と人生の様々な局面で遭遇したいじめ・マイノリティ体験をステレオタイプへの気づきと結びつけている。

筆者は、異文化理解に vulnerable な自己認識の果たす役割が大きいことを別のところで論じているが(倉地 1998)、いじめやマイノリティ経験が、vulnerable な自己を認識するための重要な契機となることはいうまでもない。転校生だとか大柄だとか小柄だとか、集団に同調しないなどと言った些細な理由で、「皆が同じでなければよしとしない」均質的な集団において、「人とは違う」というレッテル張りをされ、一人の人間としてまともに取り扱われず、理不尽な処遇に甘んじたり、あるいは外国人というだけで、差別待遇を受けなければならなかったりといった実体験を通して、理屈の上だけではなく、実感としてステレオタイプの危険性、低減の必要性を強く認識することができるようになるからである。

いじめ・マイノリティ経験を持たない2名の対象者のうち、1名は次に述べる、キーパーソンとの出会いを、今一人はその後で述べる、多様で多量の異文化接触経験と、ステレオタイプに対する自己抑制とを関連づけている。

キーパーソン

キーパーソンとの出会いがステレオタイプの表出を抑制する意識につながったと回答した対象者は2名であった。そのうち、1名は「英会話を習ってたんですが、そのときの英会話の先生に、その方には数年間教えていただいたのですが、『ステレオタイプングするな』とよく言われて、できるだけ自分の中

からそう言うものを排除しようとする意識が働いていたのかもしれませんが。その方は、黒人の先生だったんですが、『黒人だということでステレオタイプ化されるのはいやだ』とおっしゃっていて、『あなただって日本人はこうだという風に認識されるのはいやだろう』と言われて、確かにそうだと思いますね。」と述べている。これは第二外国語の教師がキーパーソンとなったケースである。今一人は、「日本語教師をしていて、1,2年経験したころ、自然とそれまで授業の中でも「日本人はどうか」といった部分にひっかかるようになってきて、矛盾点を感じ始めました。そのころ大学で非常勤をしていましたが、その大学の経済の先生との出会いがありまして、個人的にお話していたときに、当たり前だと思っていたことに疑問を投げかけてくれました。固定観念を打ち破ることが上手な先生で、ゼミに同席したりしまして、ステレオタイプは一人一人の真の姿を見ようとしても、それを邪魔して良い働きがないと思うようになりました。」と語っている。

ここで注目すべきは、キーパーソンが、「目からうろこ」のようなインパクトを対象者に与えている点である。前者の場合、単にキーパーソンである教師がお題目のようにただ「ステレオタイピングはいけない、君だっていやだろう」と言うだけではなく、キーパーソン自身のマイノリティ性が、「ステレオタイピングは問題だ」という彼の発言に現実的な重みを加え、対象者に大きなインパクトを与えている。一方後者の場合、キーパーソンにマイノリティ性はない代わりに、固定観念を打ち破ることに長じていた点、しかもキーパーソンとの出会いが、降って沸いたような出会いではなく、対象者が問題意識を抱き始めたときに、絶妙のタイミングでなされたものであるがゆえに、大きなインパクトを与えた点は、留意すべきであろう。

日本語教育における外国人学習者の多様性についての発見

キーパーソンの存在について言及した対象者のうち、一人は「日本語教育をしている中で、何人だから、どうだとか、枠にはめてみることや、日本人論的な発想がおかしいと思うようになった。」と述べている。いじめもキーパーソンの存在にも言及しなかった今一人の対象者は「(気づきが芽生えたのは)学習者と

接する中でですよね。たぶんそうだと思いますよね。意外な人が結構いるんですよ。大学にいた人なんですけど、アラブ圏から来ている人で、見るからにフセインのような人で、向き合って、向こうも何も言わないのでどうしようと思っていたら、そのうち気さくな人だということがわかったとか」と15年に及ぶボランティア教室と大学での日本語教育、対象者との異文化接触経験を通して、カルチャー・ステレオタイプを持ってはいけないという意識が徐々に培われてきたと述べている。

異文化接触経験の多いものが、ステレオタイプに対する問題意識が強いという接触仮説（contact hypothesis）を支持する結果は、本研究の結果にも一定現れているが、接触の量が多いことだけが、ステレオタイプの気づきの必要十分条件になるわけではない。キーパーソンの存在もなく、ひたすら日本語教育を続けていく中で、多様性を発見したという上記の対象者のケースをみれば、長年、ボランティア教室と大学という全く性格の違った教育環境に身をおいて、多様な背景をもった学習者に接してきたこと、しかも、大学の日本語のクラスや民間の日本語学校などとはちがった、学びの空間で10年以上もの間、少数の学習者との間で、細くて長い豊かな対人接触経験を着実に積み重ねてきたことなどが、態度形成に大きく影響しているのと考えられる。

大学・大学院での専門的な文化研究

「大学時代に、ステレオタイプの問題性を認識した」と答えたのは、7名中1名のみであった。「大学のときに自分が専門でそういうことを勉強し始めたときに、卒論を書く段階で、それこそ日本論とかに対する批判とかが出てきたときだったし、それから大学院では修論で、これ（日本論）は作られたものだというところをやってきたので、」日本人やその他の集団をステレオタイプで捉えることの危険性に気づかされたこと、オリエンタリズムや文化批判について、大学や大学院で、専門的に勉強したことを理由に挙げている。

ちなみに(1)の質問紙調査への回答者の中には、海外の大学院で文化研究を専門に勉強した経験のある対象者であるにもかかわらず、カルチャー・ステレオタイプの表出に抵抗がない者が1名いた。この対象者に対しても、予備調査の

段階で面接を行ったが、上記の対象者との大きな違いは、文化本質主義的な考えを持った指導教授の指導を受け、修論研究を行ったという点である。このことから、文化研究を専門にしたかどうかではなく、どのような考えを持った教員(集団)のもとで、どんな指導を受けたかということが、対象者のステレオタイプに対する態度形成に、何某かの影響を及ぼしていると言えよう。

() 性格特性

最後に 7 名の対象者に共通する点としては、自己分析・自己内省(reflexibility)やセルフ・モニタリングの能力に長けていて、いずれも礼儀正しく、まじめで、時間などの約束をきっちり守る、自己表現力に優れた人物であり、勉強好きで向上心があり、知的好奇心旺盛な点が挙げられる。とりわけ「自分は他人と違ってよいし、違うのが当然」、「違いを楽しむ」、「人と違う珍しいことがしたかった」と他人と違うこと、ユニークであることに大きな価値をおき、多様性に関われ、柔軟な態度を示す対象者が 5 名もいたことは特筆すべきであろう。

いずれの対象者の場合も、() のデモグラフィックス、() のその他の背景要因、() の性格特性が単独で作用しているというよりは、複数の要因間の複雑な交絡が、対象者のカルチャー・ステレオタイプに対する気づきや態度の醸成に関与していると考えたほうが妥当であろう。諸要因の複雑な交絡の諸相を解き明かすためには、今後の課題として、気づきの高い対象者のデータを事例ごとに詳細に分析する作業が不可欠である。

総合考察

最後に本研究の分析結果から、明らかになったことを、ここでは紙幅の都合上、以下の 2 点に絞って考察したい。

() カルチャー・ステレオタイプの温床としての日本語教師の教育文化

本研究において最も着目すべき点は、大学生や大学院生は、せいぜいカルチャー・ステレオタイプは危険であるとか、低減したほうが良いと建前で答えることができる程度で、実際にステレオタイプの表出場面において自己抑制を働

かせることができなかったという点である。

バーバード大学医学部の医療人類学者 Good ら(2003)は、必然的にステレオタイプを生み出す医学や医療教育の問題性を指摘し、差別は臨床家とヘルスケア・システムという文化のおそらくは一部なのだろうと論じている。一方 Eberhart & Fiske(1996)、Fiske(1993)は他者をコントロールする力を持つものは、力を持たないものに対して注意が向けにくく、ステレオタイプな判断を下しやすいと述べているが、これらの知見から推察すれば、医療文化と同様に、教育文化とりわけ日本語教育や日本語教師養成の教育文化(大学・大学院・養成講座などにおける教育文化)もまたカルチャー・ステレオタイプを生み出し、助長する文化であると言えるかもしれない。ステレオタイプ数の少ない対象者には非常勤が多く、専任教員がたった 1 名しかいなかったこと、しかもそのたった一名の専任教師の場合は、大学、大学院時代に一貫してオリエンタリズムや文化批判を研究テーマにしていたという点で、日本語教師の中では、極めて特殊なバックグラウンドをもった対象者であることがわかっている。普通の平均的な一般人よりも日常的な異文化接触の機会があるにもかかわらず、日本語教師の文化がステレオタイプを助長するものである原因としては、以下のような諸点が考えられる。

留学生 10 万人計画をはじめ、あくまで国家政策の一環として日本語教育が発展・振興してきた歴史的な経緯と、その中心的な施政者、推進者の中に内包される本質主義的・国家主義的な色彩の強い文化観と国民国家の言語・文化伝統保持の立場の影響

十分なコミュニケーション能力を持たない外国人学習者に、文化情報を供給しなければならない教師であるがゆえの(つまり、学習者から発せられるすべての問いに対しては、単純明快な解答を出し、納得させることができなければ教師として不適格だとみなされるのではないかというネーティブの外国語教師特有の)恐れや不安感の反映

本研究でステレオタイプに対する気づきを持った教員のほとんどが非常勤であったが、日本語教師の場合、特に専任教員の場合は教務や雑務に多忙で、日ごろ留学生に接する機会があるといっても授業以外では表面的な関係にとどまらざるをえず、学習者一人一人にしっかり向き合ったり、質的・量的に多様で豊かな異文化体験をするだけの時間的、精神的ゆとりがない点

日本語教師は、言語習得の途上にある日本語学習者に向き合おうとしても、

ほかの共通媒介語がない限り、日本語ではなかなか意思疎通が難しく、異文化接触や相互理解がどうしても単純で、表層的なレベルにとどまらざるを得ないと思込んでいる点

たとえ仕事であるいは教員研修などで、1,2年の海外生活体験を持っていたとしても、その間、日本語教師は、例外なく常に「教師」としての特権を行使できる立場におかれ、しかも、日本語のネイティブであるがゆえに、現地では数少ない日本語・日本文化(事情)に関する専門家・オーソリティであるという、二重の意味において卓越したポジションが自動的に付与されるがために(e.g.海外青年協力隊員、日本語教育専門家などの場合は、その上さらに、先進国から選抜・派遣されたエリートという地位が与えられる)、現地の一般の人々よりはるかに優遇され、制度的に守られる。それゆえ、まじめに日本語教師の職務に励めば励むほど、居心地の悪さ、疎外感、被差別感などを体験しやすい異文化の只中であっても、ヴァルネラブルな存在であることを、なかなか実感できず、ヴァルネラブルであることからの学びが達成できない点

() ステレオタイプの遞減に關与する教育の可能性はどこにあるのか

最後に言及しなければならない事柄は、教育に、ステレオタイプの遞減に寄与する可能性はあるのか、あるとすれば、それはどこにあるのかという本研究の終局的な目的とも關わる大きな問題である。本研究において明らかになったのは、異文化接触の経験をたくさん持っているか否かは、ステレオタイプに対する気づきの必要条件の一つであっても、十分条件ではないという点である。そして、既に述べたように、現行の大学・大学院、その他の教師養成講座などで行われている通り一遍の日本語教師養成教育では、カルチャー・ステレオタイプに対する気づきを高めることは難しいという点である。この点に関しては、本研究の対象者の中に、中学、高等学校の正規のカリキュラムや中高の教員の影響で、ステレオタイプの問題性を覚知したと語る者が一人も存在しなかったことからみて、現行の大学や大学院教育のあり方、養成講座のあり方に問題があるというだけでなく、公教育全体の責任も決して免れない。

教育がステレオタイプ遞減に寄与する可能性に関して、少なくとも、本研究の結果から言えることは、(1)家庭教育(すなわち親の養育態度)は極めて重要であり、(2)学校における道徳・社会科教育、国際理解教育などの正規のカリキュラムよりは、むしろいじめ・マイノリティ体験からのインフォーマルな学びや、生涯教育の場におけるキーパーソンとの出会い、ないしは(3)高等教育段階にお

ける批判的な文化研究の視点導入などに、何らかの活路を見出すことができるのではないかということである。

高等教育機関や民間の養成機関における現行の日本語教員(教育ボランティア)養成の抜本的な見直しが必要なことは言うまでもないが、それにとどまらず、家庭教育や公教育、生涯教育、現職教員研修のあり方を再考することも視野に入れねばならないのである。

参考文献

- 青木保 2001 『異文化理解』岩波新書
倉地曉美 1998 『多文化共生の教育』勁草書房
倉地曉美 2003a 『ボランティアと日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ：認識と自己抑制に関する研究』『広島平和科学』25, pp.81-108
倉地曉美 2003b 『留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究』平成 13 - 14 年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書 研究代表者 倉地曉美
倉地曉美 2004a 「カルチャー・ステレオタイプの危険性・遞減の必要性を認識しない教師とボランティアに関する分析」『日本語教育学科紀要』広島大学大学院教育学研究科 Vol.14, pp.9-15
倉地曉美 2004b 「カルチャー・ステレオタイプの問題性に対する認識を持った教師とボランティアの反応」『国際化情報社会における日本語教師養成システムの開発研究：平成 15 年度広島大学大学院教育学研究科リサーチオフィス研究成果報告書』pp.67-78
倉地曉美 2004c 「カルチャー・ステレオタイプの問題性を認識している教師と認識していない教師に関する比較考察」『広島大学大学院教育学研究科リサーチオフィス共同研究プロジェクト報告書』Vol.2, pp.182-195
Allport, G.W. 1954 *The Nature of Prejudice*. Reading, M.A.: Addison-Wesley.
Adorno, T. W., Levinson, D.J., Frenkel-Brunswick, E., & Sanford, R.N. 1950 *The Authoritarian Personality*. N.Y.: Harper.
Eberhardt, J. & Fiske, S. 1996 Motivation individuals to change: What is a target to do ? In C. Macrae et.al (eds.), *Stereotypes and stereotyping*. N.Y.: Guilford Press. 369-415.
Fiske, S. 1993 Controlling other people: The impact of power on stereotyping. *American Psychologist*, 48, 621-628
Good, M.D., James, C., Good, B., & Becker, A. 2003 The Culture of Medicine and Racial, Ethnic, and Class Disparities in Healthcare. In Institute of Medicine of National Academies (ed.) *Unequal Treatment: Confronting Racial and Ethnic Disparities in Health Care*. Washington D.C.: The National Academies Press. 594-625

